

# 希望を求めて

## AMD A 30年

②

開いた国際会議に、タンラさんが教える医学生が参加。だが、途中で体調を崩した。

菅波さんの診察を受け

ねた。菅波さんはAMD Aの構想を熱心に語り、2人は意気投合。その場でインドネシア支部の開設を決めた。

以来、タンラさんはさまざまな現場で協力してきた。92年、インドネシア・フロレス島の地震と津波の被災地には、AMD A本部の依頼を待た



### AMD A 多国籍医師団

「アジア多国籍医師団」として、1993年にネパールやフィリピンなどの医師らと結成。構成員はAMD A 海外支部として、現在では南米、アフリカ、欧州などにも広がる。支援活動では、現地の支部が指揮をとる「ローカルイニシアチブ」を重視。支援に入ったことを機に、その国に支部を設立することもある。

世界の災害地や紛争地で活動する医療NGO「AMD A」（北区伊福町3）の大きな特徴は、30カ国の海外支部から成る「多国籍医師団」だ。

医師仲間のネットワークは素早い支援に役立つだけではない。土地の習慣を熟知した医師がいることで、被災者に寄り添った支援ができる。なぜ、こんなネットワークが作られたのか。答えは、AMD A 創立者の菅波茂さん（67）＝マレーシア事務所（首都クアラルンプール）勤務＝が顔と顔を合わせ

た。菅波さんはとて親切で誠実だった」と話した。翌86年、来日の際に日本の医学生との交流のために菅波さんら

話一本で緊急救援チームとしていた菅波さんは、医学生と一緒にカンボジア難民支援のため難民キャンプを目指した。だが、現地の受け皿がなく、活動できないまま帰国を余儀なくされた。「受け皿がないなら、作ればいい」。海外に医師仲間を作るため、翌80年から国際会議を企画した。その成果が、タンラさんら多国籍医師団だ。

# 信頼でつながる協力者

ずいといち早く駆けつけ、1万人以上の被災者を診察した。

2001年のアフガニスタン難民支援、04年のスマトラ沖大地震、11年の東日本大震災……。電

を派遣してくれる。「戦争や災害で疎外された人たちに目を向けるAMD Aの姿勢に共感している」とタンラさん。「多国籍医師団があれば、迅速に、効果的に災害を切り抜けることができると自負する。」

菅波さんにとって、多国籍医師団の原点は79年にある。岡山の病院に勤務

フィリピン・マニラで今年3月にあった国際会議で、菅波さんらAMD A本部と海外支部のメンバーは顔を合わせた。親しげな笑顔で、AMD Aの今後を熱心に語り合う。国境や宗教を超えて力を合わせる、力強い仲間だ。

【五十嵐朋子】

## インドネシア支部長のタンラさん

最も古い海外支部の一つ、インドネシア支部。支部長で同国マカッサルの麻酔科医、フスニ・タンラさん（71）と菅波さん



今年2月、インドネシア・マリノで農業支援をしたAMD Aの菅波茂さん(左)とフスニ・タンラさん(中央)＝タンラさん提供



### AMD Aインドネシア支部（マカッサル）

【五十嵐朋子】

## 多国籍医師団